

「消化管エコーの診かた・考えかた」

天竜厚生会診療所 湯浅 肇 著
岸和田徳洲会病院腹部超音波室 井出 満

横浜総合病院

秋 本 伸

消化器領域の臨床で超音波検査が必須のものになったことは誰も異論のないところであろう。しかし、こと消化管については今日必要性、有用性いずれについても認知されているとは言い難い。この点は著者自身が本書の序に記しているとおりでである。かつて消化管の超音波診断(例えば潰瘍の超音波所見の検討といったようなもの)については診断機器の精度の問題もあり学会レベルでも厳しい評価がなされることが一般的であった。かくいう私も正直なところ消化管に対してはごく限られた疾患以外役に立たないと考えた時期がある。著者がその当時から一貫して超音波による消化管診断の可能性について主張し続けてきたことは注目すべきであり、パイオニアと言っても過言ではなからう。今日多くの消化管疾患にとって超音波検査が役立つことは本書に示されたとおりで、

筆者も現在は消化管の日常診療で超音波を大いに活用している。

著者らのこの領域での先駆者としての自信のほどは、豊富な経験症例の呈示にも見てとれる。胃十二指腸潰瘍、回腸炎、大腸炎、虫垂炎、消化管腫瘍、ヘルニア、腸閉塞、そのほか様々な典型的超音波所見が示されている。しかし著者の自信は、何よりも消化管超音波診断法についての主義主張が明確で説明に迷いが無い点に最もよく現れている。

解説、説明文は具体的でわかりやすい。随所に置かれたコーヒープレイクは初学者にも役立つ親切なアドバイスであるが、ここにも著者の独特な語り口とともに明確な立場が示されており興味深い。

図にはすべて丁寧でわかりやすいシェーマがつけられており読者には大変ありがたい。ただ図(写真)が部分的で小さい嫌いがあり、この点は

やや初心者には理解しにくいのではないかと懸念される。“症例から学ぶ”の項では多岐にわたる疾患について1頁ないし見開き2頁で、要領よく検査のポイントと考え方の解説が行われている。経験豊富な検者にも大変参考になろう。ここでは他の診断法、例えばX線検査や内視鏡検査、病理所見との対比も欲しいところであるが、コンパクトにまとめるということからすれば無理な注文か。

超音波診断に関しては数多くの書物が巷にあふれているが、独自の領域で思う存分に筆をふるったものはそれほど多くはない。その意味から本書は著者のこの領域に対する思い入れを感じさせる好著と言えよう。

● B5 頁198 図383 写真306 表7 1998 定価(本体5,500円+税) 7400

医学書院 刊(☎03-3817-5657)